

## ニコライの日本語教師 — 木村謙齋 —

持田 行雄

## KIMURA KENSAI — Nikolai's Teacher of Japanese —

MOCHIDA Yukio

## はじめに

世界のすべてが、我々の環境が、そして我々自身が、絶えず目まぐるしく変化する。やがて、変化の結果は歴史になる。その巨大な歴史の流れの中であって、しかし、変化しない何か動く。ブルクハルトは、それを「忍苦し、努力し、行動する人間」であるという(1)。歴史は人間が創る。その歴史の中に変化しない永遠的な中心として、人間それ自体を考える。この大文字の人間は理念として、確かに観念の世界には実在する。しかし、それは同時に決して単に観念だけに留まるものではない、この現実の我々のうちに存在する我々自身でもある。

我々に外在する神でもなく、救い主でもなく、まして唯物論でも唯心論でもなく、我々自身の中にある人間そのものを考察の中心に据えた。そこにブルクハルトの良心がある。彼の偉大さがある。

アリストテレスによれば、人間のすべての営みは何らかの「善いもの」を求めており、そして、最高の「善いもの」とは「幸福」(EUDAIMONIA)であるという(2)。幸福倫理学の成立である。それがアリストテレスであるが故に、倫理学の最初の成立である。

もし我々自身とその人生において、一人でも多くの、ブルクハルトが言う「忍苦し、努力し、行動する人間」と共に生きて、彼等の語る言葉に耳を傾け、彼等と共に語り合い、人生の未来に彼等から何らかの示唆を与えられ得るならば、その我々の「営み」は、たとえそれが観念の世界の出来事に過ぎないとしても、否むしろ、観念の世界の事柄であればあるほど、アリストテレスの言う魂の「幸福」(3)となるはずである。無論、それが「テオリア」(観想)の生活(最高の幸福な生活)からは程遠いものであろうとも、それが、人間の「魂の卓越性に従う活動」である限り、アリストテレスが語り、我々が認めてきた「一つの幸福」であることは確かなことなのであるから。

もしそうであるならば、この人間の「幸福」を捜し出すこと、しかも、それを人生の「典型」の一つとして捜し出すこともまた、倫理学の重要な仕事の一つになるはずであり、また、ならなければならないだろう。

本小論は、この「忍苦し、努力し、行動する人間」すなわち「人間の典型そのもの」を探そうとする一つの小さな試みである。しかし、それは同時にまた、我々自身の「幸福」を見出だそうとする「営み」にもなるはずである。これから、その「人間探し」を日本ハリストス正教会の、それも最初期の発展史に焦点を合わせて、試みてみたい。無論、今回もまた、その探索の方法は、筆者がこれまで主張してきた「倫理的実在論」(4)の方法論によることになる。

単に歴史に名を留めているに過ぎない、歴史の中に実在したどのような人物よりも、「ハムレット」や「ファウスト博士」の方が、「我々にとっては」(for us)、はるかに「実在的」である。彼等こそ、「かつて」真に我々自身の「人間」を形成し、現実に我々自身の中に実在して、我々と共に「いま」忍苦し、努力し、行動している人間、そして「これからも」そのように働くであろう人間だからである。

まして、本小論がこれから取り上げようとしている人物は、実際にも歴史の中に実在して活躍した人物である。「倫理的実在論」の有効性がますますよく実証されることを期待してよいのではなからうか。

我々はまた、伝説や逸話等も、それらが史実性を実証出来ないからと言って、決して捨てたりはしない。それらが真に「忍苦し、努力し、行動する人間」を我々のうちに実在させてくれる「働き」を持つならば、すなわちそれらが真に我々自身をアリストテレス流の「幸福」たらしめてくれる人間形成の「働き」を持つならば、我々はその「働き」を決して捨て去ることはないだろう。むしろ大切にしていきたいと願っている。

従って、本小論は、逆に言えば、筆者が長い間試みて来た「倫理的実在論」の有効性を確かめる「営み」でも

ある。この立場から行なう「人間の典型」の探求は、どのような「幸福」を我々にもたらしてくれるのだろうか。

本小論はその限定を負いつつ始められることになる。

## I

日本への布教を決意したイオアン・デミトリウィチ・カサーツキン (Ioann Dimitrivich Kasatkin, 1836—1912, 後のニコライ大主教) が、日本のロシア領事館付司祭として幕末の箱館に渡来したのは1861(文久元)年6月のことである。ニコライは来日と同時に「日本語の研究」を開始するが、その研究は単に日本語ばかりでなく日本文化のほとんどすべての分野にまで及んでいく。しかも、それはまさに「驚異的」としか言いようのない驚くべき熱意をもって行なわれていった。

この間の事情については『日本正教傳道誌 卷之壹』に次のように説明されている。すなわち、——

「修道司祭ニコライ師は、日本帝國當時の形勢を觀、福音を傳へて、救贖の道を布き、この人民に眞誠なる幸福を得しめんとするの希望いよいよ切なりしかば、先これが準備として、日本語の研究を始めた。それよりニコライ師は、常に日本の言語を研究したるのみならず、當時函館に在住せる、和漢の學に通ぜざる學者、または僧侶の輩に就きて、博く和漢の書籍を読み、儒教の經書、史傳は勿論、古事記・日本紀・大日本史の類より、神道・佛書の類をも研究せり。ニコライ師は、この間に日本帝國の開國以来の變遷より、人情風俗をも詳かにするを得」というのである(5)。

また『大主教ニコライ師事蹟』にも次のように語られてきた。すなわち、——

「當時切支丹禁制の令嚴にして、傳道の自由を得られなかつたから、ニコライ師は先ず日本語の研究を始め、秋田大館の人木村謙齋を國語の師となし、次で國史の研究をし、舊來の教育法を觀察して儒教、神道、佛教より、日本美術の精粹をも究めた。斯る事業は因より一朝夕にして成し遂ぐべきではない。將來宣教の準備として此研究に費した時日は幾んど七年で、儒教は經書史傳を涉獵し、國書は古事記、日本書紀、大日本史等より稗史小説に至るまでを讀破し、佛教の如きは學僧に就て大乘、小乗の諸説を咀嚼した」というのである(6)。

ここには、前書に見られなかつた「木村謙齋」への言及が現われているが、しかし、謙齋はニコライの単なる「國語の師」に過ぎなかつたような記述になっている。

多分、本書に依拠したと思われるその後の研究では、しかし、「日本美術の精粹をも究めた」までを木村謙齋によるものと解釈するのが最も一般的である。例えば、牛丸康夫氏はこの辺りを次のように書き替えておられる。

「日本語の教師として、秋田大館の木村謙齋という人を迎え、國史研究、儒教、神道、仏教、などの東洋の宗教や學問を研究し、日本美術の粹にまでもふれることができた」云々と(7)。

無論、単に「國語」だけを教えるなどということはありませんから、やはりこのような解釈の方が正しいのであろう。しかし、もしそうであるならば、この頃は未だ二十代半ばの青年であったニコライが、この謙齋を通して初めて本格的に異文化としての日本文化に触れたのであるから、謙齋自身はニコライの人間形成に測り知れないほど大きな影響力を持った人物であつたと考えてよいのではなからうか。従って、若き日のニコライ研究は同時に木村謙齋という人物の研究でもなければならぬはずである。

それにも拘らず、同時に木村謙齋研究でもあるようなニコライ研究は、残念ながら未だほとんど見受けられないようである。謙齋はニコライよりも22歳も年上であり、ちょうど壮年期のいわば「油の乗り切つた」時期にあつた。それだけに、ニコライへの影響は一層大きかつたものと考えられる。しかし、もしそうであるならば、木村謙齋とは一体誰であつたのだろうか。

## II

ニコライに日本語や日本文化を教えた秋田大館藩の儒學者「木村謙齋」とは、どのような人物であつたのだろうか。全国版の歴史人名事典や日本史事典などにこの名を見出すことはまず不可能に近い。また、幕末・明治の日本文化や日本歴史に関する研究書などにも、ほとんど登場しない。わずかに最初期の日本ハリストス正教会もしくは宣教師ニコライの若き日の歴史に関する研究書の中に時折言及されるに過ぎない。それも若き日のニコライに関わつた人物の中の一人として取り扱われるのみであつて、謙齋自身が中心的に研究されることはまず無いと言つてよいだろう。従って、「木村謙齋」の名はポピュラーではない。しかし、ポピュラーになってよい。

謙齋の七男の木村泰治は、台灣実業界の重鎮であつた。また晩年、岳温泉の開発に努力した人物としても著名である。従って、「秋田の先覚」とか「秋田人物風土記」などといった名称の下に、「近代秋田をつちかつた人びと」の一人として、必ずと言つてよいほどよく取り扱われている。そして当然そこには父親謙齋の名も言及されている。その他にも、これらと同様に秋田の歴史を中心として研究された地方的な資料が、かなり多く存在しているようだが、それらは地方的であるが故に入手し難く、筆者の未見のものもかなり多い(補注1)。

昭和46年2月16日(火曜日)の「秋田さきがけ」新聞

に、この日が「日本に初めてギリシャ正教を伝道したニコライ大主教の命日」であることに因んで、謙齋一家が箱館を去って帰郷する時、ニコライがお礼に贈ったコップが写真入りで紹介され（後述）、ここにわずかながら謙齋の略歴や功績などが述べられている。

多分、この記事に関連して、ほぼ1ヶ月後の昭和46年3月13日には、同じ「秋田さきがけ」新聞夕刊の「秋田の人物」欄に、謙齋の孫に当たる木村昇平氏（大館市部垂町在住の眼科医）によって「医師 木村謙齋」と題する記事が掲載された。ここには謙齋の生涯と功績とがかなり詳しく紹介されている。

更に、『秋田人名大事典』（秋田魁新報社発行、昭和49年8月1日版）の「木村謙齋」の項に見られる記述は上記の木村昇平氏の紹介文とほとんど同じである。またこの大事典の第二版（平成12年7月1日発行）の内容にもほとんど変更はない。ただし、第二版では謙齋に関する逸話類が、紙数の都合によるものか、それとも、事典類の内容としてはふさわしくないものでも判断されたためか、すべて削除されている。

なお、石田秀一著『秋田の医史覚え書き』（平成5年12月発行、非売品、秋田大学附属図書館医学部分館所蔵）にも、わずかながら木村謙齋に関する言及が見られるが、上記の諸紙の記述に付け加えられるべき新しい内容は何も見出だせないようである（8）。

従って、このような事実から考えれば、当然、上記の諸紙すべてに共通する底本の存在が推測される。多分、それは、内容や印刷・発行の年月などから見て、遠藤正雄氏を編者として、昭和三十五年四月八日に岳温泉株式会社から発行された著作『九十余年の奇運 地天老人一代記 木村泰治自叙伝』（非売品）であったろう。

すでに見たように、木村泰治は謙齋の七男として生まれ、長じて台湾の実業界で活躍し、晩年は岳温泉の復興に尽力した、秋田県の誇る先覚である。

本書は、泰治が晩年、埼玉県野市の自宅の病床で九十余年の生涯を自ら回想し口述したものを遠藤正雄氏が執筆・編集して出版した作品である。原稿用紙四百五十枚にもものぼる大作であるが、非売品であった。

因みに前述した大館の眼科医、木村昇平氏はこの泰治の長男（すなわち謙齋の孫）にあたる。

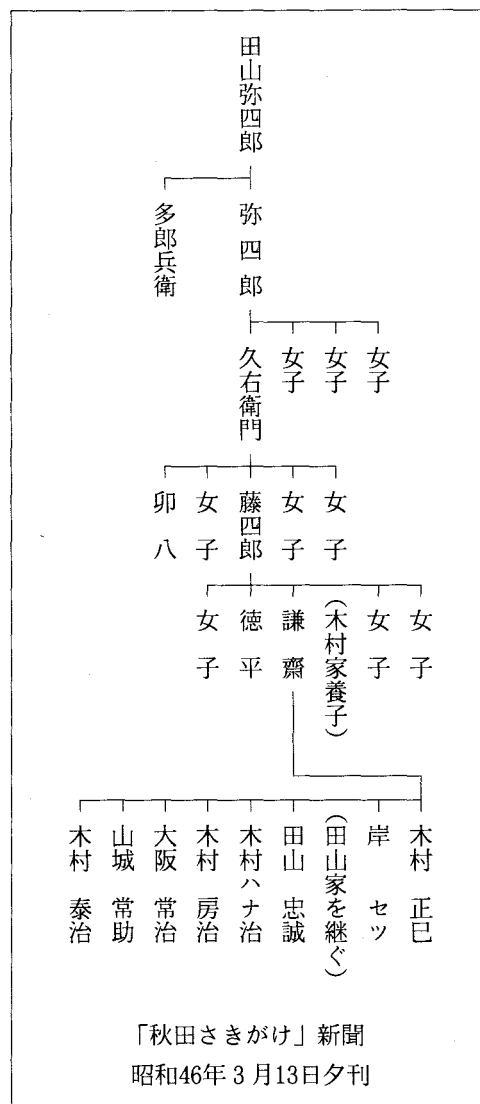
泰治の口述を執筆した遠藤正雄氏は、「翁の博識、記憶の確かさ、そしてそのひたむきな熱意に思わず深い感動を覚えながら筆記を終わることができた」（「あとがき」299頁）と語っているが、更に、氏は泰治が言及した各所に赴いて口述内容の確認と補充をも行なっている。

このような本書成立の事情とその内容から見て、多分、本書以降に現われた木村謙齋に関する言及内容の大部分は本書からの引用もしくはその孫引きに依るものと考え

てよいだろう。とりわけ本書の「生い立ち」「三、父、謙齋」の箇所（11-20頁）には、上記諸紙の記述内容のほとんどすべてを見出だすことができるのである。

以上の理由によって、いまは主として『地天老人一代記』及び木村昇平氏の紹介文等を中心にして、多少の解釈と改編を加えながら、以下に少し木村謙齋の生涯と功績をまとめてみることにしよう。無論、これらの記述は、もし新しい別の資料が発見されるならば、当然修正されるべき内容のものである。その点は十分に留意されなければならない。

### III



木村謙齋は1814（文化11）年、秋田の久保田藩沼館村（現大館市沼館）に田山藤四郎の長男として生まれ、姉2人と弟徳平の下に、妹1人の5人きょうだいがあった。幼名を弥六といったが後に光永と改め、謙齋と号した。

田山家は代々、百姓を業

とし、土地の豪農であった。先祖は南部田山から移住したとの伝承があるが、何時の頃の移住か分かっていない。田山本家の田地が古来から沼館村に最良の位置を占めているところから見ると、移住年代は肝煎（きもいり）佐々木家が関東より移住した時代よりもやや古いのではないかと推測されている。

しかし、代々、百姓であったために、元禄以前の系図は不明である。木村泰治が調査した元禄・宝永（17世紀末、18世紀初頭）頃までの系図の概略が『地天老人一代記』に載っている。上記の系図は、それを木村昇平氏が更に簡略化して新聞に掲載したものである。

謙齋は幼少から読み書きに勝れていたが、「せむし」（くる病）に生まれたため、家業の農業を継ぐことを断念し、田山家の相続を弟の徳平に譲り、久保田（現秋田市）に出て、久保田藩の藩校「明德館」に学んだ。

他方、木村家は大館の内町と外町（とまち）の境にある風呂屋町に屋敷を持ち、代々、典医を務める家柄であったが、当時、子供は女だけで男の子がなかった。

ある日、その頃、向町に住んでいた医師の道隣（どうりん）が久保田に行き、謙齋を見つけて大館に連れ帰った。そして、木村家の親子を集めて、得意になって、「日本一のよい婿を見つけてきたぞ」と紹介したが、木村家の娘コヨは、初め「せむし」の謙齋を見て、びっくりして泣いたという。

木村家を相続した謙齋は、大館佐竹西家（佐竹藩大館城代）のお抱え医師となり、少禄を食むことになる。やがて妻コヨとの間には3男1女、後妻のスエとの間には更に男子4人、の計8人の子供をもうけている。

のち、二男の忠誠が田山家を継いだ。七男の泰治は、すでに見たように、台湾の実業界で活躍した後、岳温泉の開発に功績を残している。

謙齋が生きた時代の日本は文字通り「内憂外患」の時代を迎えていた。ロシア船が松前や津軽の沖に出没し、東北諸藩に緊張が高まった1855（安政2）年に、幕命によって久保田藩に蝦夷地警備の出兵が命じられ、渡島して西蝦夷地の警備にあたることになる。そして2年後には、大館からも北辺警備の派兵が行なわれている。謙齋はこの派兵の軍医として渡島した。そして、箱館郊外の増毛（ますけ）詰めとして勤務する。

更に解任後、再び渡島して箱館に医業を開き、傍ら私塾も設けて、蝦夷地警備の武士に漢籍を講じた。

日本にロシア正教を宣教する準備として日本語と日本文化を研究するために来日していたイオアン・デミトリウィチ・カサーツキン（後のニコライ大主教）と出会ったのは、ちょうどこの時である。

ニコライは、1861（文久元）年から1872（明治5）年までを箱館に滞在し、日本研究に打ち込んでいる。たまたま謙齋を知り、その塾に通い、「日本語、日本史、儒教、佛教」等の手ほどきを受けた。おそらくこの時未だ25、6歳であった若い長身のニコライが、山中という通訳を帯同して塾に通い、背の低い謙齋についてほとんど毎日のように熱心に勉学に勤しんだという（補注2）。

ニコライは非常に議論好きで、謙齋とよく論争し合い、

大声で納得のいくまで話し込んでいた。それは日本の書生とはまるで違う熱心な勉強ぶりであった。謙齋は「易学」をよく研究し、造詣も深かったので、二人の議論の焦点はおそらく「易」ではなかったかと推測されている。彼等二人は互いに相手を激賞し合ってもいた（9）。

ニコライは、謙齋の塾に来ると、必ず台所に入って来て謙齋の妻に、「これは何というスープか、この黄色い大根は何というのか」等と味噌汁や沢庵について質問し、当時、粗末なものしか食べていなかった一家の台所をあずかる謙齋の妻に、非常に恥ずかしい思いをさせたとのことである。しかし、ここには学究熱心なニコライの面目躍如たるものがある。

また、ニコライは、よほど謙齋の学識、品性に傾倒したらしく、「先生は子沢山だから、その中から房治（四男）さんか常治（五男）さんを下さい。弟の方を下さい。ペテルスブルグ（レニングラード）にやって学問をさせよう」としきり口説いたが、両親はこれを断ったという。もし本当にこの話が実現していたならば、日露の国交の上で、面白い役割を果たす人物になっていたのではないかと「惜しい気がする」と泰治は語っている。

これとほとんど同じ逸話を紹介した後、中村健之助氏は「ニコライが来日の当初から日露の間に人の橋をかけようと企図していたことが、この短い話からも推察できる」と付言された（10）。

ニコライは日露間に人的な交流を図ることによって、やがて来るであろう自由な宣教のための社会的な基盤作り（宣教の土台作り）を考えていたのだろうか。それとも、宣教の問題はひとまず後に回して、まずは人材の交流によって両国間の平和的な友好関係を促進させようとも考えていたのだろうか。事実、当時の日本では、諸外国から国を鎖し続ける方がよいと考える勢力も、まだまだ悔りがたい力を持っていた時代であった。

とまれ、ニコライが日露間の人材交流を進めようとしていたのは確かなことである。ニコライは事ある毎に、野心に燃えた日本の青年達がロシアに渡ることを助ける労を惜しまなかったという。事実、例えば、嵯峨壽安の場合がそうであった。

金沢出身の嵯峨壽安（1840－1898）が初めてニコライを訪問したのは、1866（慶応2）年7月のことである。26歳になっていた。以来、両者は意気投合する。そして気脈を通じて2年有余、互いにそれぞれの言語を教授し合ったという。一日1時間、壽安は日本外史をニコライに講述し、ニコライは壽安にロシア語を口授した。

この交換教授が機縁となり、ニコライはやがて加賀藩に壽安のロシア遊学を推挙することになる。ニコライのこの願いは聞き届けられ、壽安は1871（明治4）年に、函館からロシア軍艦エルマーク号に乗船してロシアに渡っ

て行く。こうして、壽安は「みずからの意志でシベリアを横断した最初の日本人」となった。

しかし、帰国後の壽安が、本当にニコライの望んでいたような日露間の人の架け橋になったかどうかについては多少の疑問が残る。殊に、壽安の後半生は日清戦争後の時期にあたり、対戦国ロシアに関して軍事情報が盛んに求められていた時代であった。そのため、壽安は、そのロシア語の語学力を買われて、参謀本部の機密情報関係の任務に就いたらしく、従って、その後半生については不明な点が多く、あまりよく分かっていない(11)。

それ故、ニコライが「日露の間に人の橋をかけようと企図」していたことは確かであったとしても、しかし、実際には、謙齋の子供達の場合と同様、壽安の場合にも、事態はニコライの望んでいたような方向へ展開していくことはなかったようである。そして、壽安もまた、おそらく、正教の信仰や教義に触れながらも、木村謙齋や新島襄と同様、日本ハリストス正教の信仰生活とはかけ離れたところでその生涯を終えている。従って、後で見るように、宗教（特にキリスト教）に関して言えば、この嵯峨壽安という人物の生涯もまた、幕末・明治期において、日本の知識人達が、現代の我々に残してきた一つの生き方の（たとえ端的には諾い難いとしてもなお）典型の一つとして見て取ることが出来るのではなかろうか。

とまれ、1864（元治元）年には、謙齋一家が箱館を引き上げて帰郷する。この時、ニコライは記念に当時としては非常に珍しいコップ2個とフォーク1個を謙齋に贈った。このコップ2個と謙齋自身のコップの箱の箱書き及び「ニコライと父謙齋についての地天老人の覚書」の写真が『地天老人一代記』の17頁に紹介されている。更に、この話は、すでに見てきたように、昭和46年2月16日の「秋田さきがけ」新聞紙上に二葉の写真入りで紹介された（詳細は後述）。続いて、同じ「秋田さきがけ」新聞の同年3月13日夕刊の「秋田の人物」欄には、謙齋の孫にあたる眼科医の木村昇平氏によって「医師 木村謙齋」の略歴、功績等が紹介された。

大館に帰郷後の謙齋は、やはり医業の傍ら、自宅の広い板の間を開放して私塾を開き、いつも二、三十人の子弟の教育に当たっていた。更にしばしば、同じ開業医の川瀬玄探や高瀬玄雄等と、大館の現状と将来、特に医業について熱心に議論を行ない、「郷土の衛生と医術の完備を図るためには町内在住の医師を糾合して、時代に即応した近代医学を施すべきである」と主張していた。当時の医学界にとってはまさに「卓見」であったと評価されている。ニコライに接して西洋医学の卓越性に目を開かれたものと思われる。晩年の謙齋は、自己の信念を実行に移すべく、川瀬・高瀬等8名の大館町在住の開業医達と計画して、私立大館病院の設立に奔走する。

しかし、設立のメドが立ち、設立内容の具体的な協議に入った時、過労が祟って病に倒れてしまう。謙齋は病床で指示を与え、更に、川瀬玄探、高瀬玄雄、謙齋の長男の木村正巳、そして弟子の名越辰蔵等が謙齋の志を継承して病院の設立を主唱し、ようやく1879（明治12）年5月には、私立大館病院の開設が認可された。

謙齋は発病後、ほぼ3年余りを病み、1883（明治16）年2月21日に69年の生涯を終える。

私立大館病院は、同年6月、謙齋の死のわずか4ヶ月後に、横山勇喜（当時、県会議員、後、大館出身初の代議士）等が設立委員となり「附近四十九町村と聯合」して公立大館病院となる。公立初代院長には東京大学医学部から高階経本が派遣されて就任している。「当時秋田県当局が、県下に四大病院を置き他の模範たらしめ、漸次他の郡に及ぼす方針を樹て、北秋田郡では私立大館病院を適格と判断した」からであった(12)という。1966（昭和41）年2月、1市2町による公立組合形態を解消し、新たに市立病院として発足する。現在の大館市立総合病院の前身である。

木村謙齋の法名は「尚義院仁誉謙齋光永居士」と言い、その碑は大館市の「一心院」にある。

#### IV

謙齋には、幾つかの逸話がある。史実か否かを不問のまま、多少の解釈を交えながら、次にまとめて紹介しておこう。謙齋という人物の「人となり」を見事に示す格好の資料であると思われるからである。なお、資料の内容は先に言及した諸作品によるが、それらの作品がどのような性格のものであるかについてはすでに説明してあるので、ここでは触れないことにする。また『秋田人名大事典』の第二版には、すべての逸話が削除されていることについてもすでに述べた。

〔逸話 1〕 ある時、患者が全快したので、謙齋が「もう薬は必要あるまい」と言うと、患者は「でも念のために是非お薬をいただきたい」と要求した。そこで謙齋は「必要のないものはやらない」とつっぱねたが、患者がなおも「是非いただきたい」と食い下がったので、ついに腹を立てた謙齋は「そんなに薬がほしいのなら、ほかの医者に行って貰え」と言って追い返してしまったという。

謙齋の「無欲さ」には定評があったらしく、俊才と讃えられ、名医と誉められながら、「無欲恬淡」に過ぎ、いつも貧乏していたようである。子の木村泰治は崇拜、私淑する人物として内藤湖南と父親の謙齋とをあげているが、「父の無欲は私の及ぶところではない」と話していたという(13)。

『地天老人一代記』(12頁)にも「母の語るところによると、父はまことに無欲恬淡な人で、私の到底及ぶところではなかったらしい」と語られている。

〔逸話 2〕 ある時、家老の病気で家老宅に往診に行き、診察後、四方山話になった際、家老が「時に下女を雇いたいが、貴殿は処々方々に廻られるから、よさそうなのがあったら、お世話願いたい」と頼んだ。すると謙齋は形を改めて、「自分は医者であって人間の周旋屋ではない。世話をご免」と席を蹴って帰ったという。

たとえ相手が家老であろうとも、決して己れの信念は曲げない。頑固一徹な謙齋の面目躍如たるものがある。

謙齋は医師であると同時に儒学者であり教育者でもあったが、なぜか我が子には何ひとつ教えこもうとはしなかったらしい。学問好きの父としては不思議だったと泰治はこれを「ナゾ」としているが、子供達が自ら学ぼうという意欲の湧いてくるのをじっと待っているという態度だったようである(14)。

事実、泰治は父のこのような態度について次のような体験を伝えている(『地天老人一代記』, 17-18頁)。

「父は・・・人に教えながら不思議に私には何一つ教えようとしなかった。私に教えなかったのは何故か、今に至ってもわからない。だから、私は学校から帰っても復習するためにカバンを開いたという記憶が全然ない。次の日、そのままカバンを持って登校する。

(中略)

父から習ったといえ、たった一度こんなことがあった。私は自分の名前の「泰」の字の書き方をきいた。父は、「とてもむづかしくて覚えられぬぞ」といって、イロリの灰の中に火針で何十ペンとなく「泰」の略字を書いて見せた。

庭にヒューツと茎を出して春先早く咲く花があった。「何という花ですか」「むづかしくてわかるまい。しかし、覚えられるかな」といって、「まんじゅがすきか」「大好きです」「鮭はすきか」「大すきです」「これはまんじゅしゃげ という花だ」と教えられた。

これなども謙齋の「人となり」を示す逸話の一つと数えてよいかもしれない。

そして、これらの逸話は、木村謙齋という人物がどのような人間であったかを見事に示していると言ってよいだろう。しかし同時に、謙齋と関わっていた人々が、謙齋をどのように理解していたかを知るための格好の材料ともなっている。彼等は、謙齋をこれらの逸話の中の人柄のような人物として理解し、尊敬し、そして共に生き、やがて追憶しているのである。従って、このような謙齋とこのような人々とは造り出してきた世界は、たとえ個々の事実が史実に合わないとしても、あるいは史実に反しているとしても、なお倫理的には確実に実在してきた世

界なのである。我々はこのように倫理的に実在する世界の中に、そしてそこに実在する人々と共に、我々の文化を作り、伝統を作り、共生への道を歩んで来た。そしてこれからも共にそうしつつ歩んで行くことだろう。

ここに動く「人間共同体の存立根拠」は素直に「愛」と呼んでよいものなのかもしれない。

逸話の真偽性や史実性を問わず、むしろ、それらの中に「我々にとっての」倫理的な価値を探っていく。それが、筆者が久しく主張してきた「倫理の実在論」によって行なう逸話の解釈学なのである。

さて、もう少し謙齋とニコライとの関わりについて考えてみよう。そうすることによって二人の「人となり」をより鮮明に理解することが期待できるかもしれないからである。

すでに触れたように、昭和46年2月16日(火曜日)の「秋田さきがけ」新聞には、「お礼に贈ったコップ」・「木村さん(大館)が保存」・「ギリシャ正教のニコライ大主教」・「伝道のため日本語を学ぶ」という沢山の賑やかな見出しの下に次のような記事が掲載されている。

「十六日は・・・ニコライ大主教の命日」、「百年以上も前、このニコライ大主教が初めて日本を訪れ、大館出身の医者から日本語や漢書を学んださい、そのお礼に贈ったというガラスのコップが現在もあり大主教の命日に当たり関係者の話題になっている。」そして「この人は大館市部垂(へだれ)町、眼科医木村昇平さん(62)の祖父にあたる木村謙齋氏(1814-1883)」とあり、続いて、謙齋がニコライと出会った経緯が説明され、「元治元年(1864)に、謙齋氏が函館を引きあげて大館に帰るさい、ニコライ師から記念に贈られたのが当時としては非常に珍しかったガラスのコップとフォーク、フォークは無くなったが、このコップは現在でも木村家の家宝として大事にされている。」また、「コップを入れてある箱には「西洋茶碗並西洋箸入」と謙齋氏が記してあり、どっしりとした厚めのコップが納められている。」と報告されている。更に、「謙齋氏の孫にあたる木村昇平さんは、謙齋氏の死後に生まれたので、謙齋氏に関する記憶はない」とのこと。だから、「木村さんが、昭和十二年から二年半ほどやはり軍医として奇しくも函館に勤務したこともあるが、〈当時は、祖父が函館にいたことすら知らなかった〉」ともいう。

また、この記事には上下に二葉の写真があり、上の写真には「ニコライ大主教から木村謙齋氏に贈られたガラスのコップ(左側箱の上)と当時の記録を示す資料と孫の木村昇平さん」、下の写真には「ニコライ大主教」という説明文が付されてある。

なお、中村健之助氏がこのコップ二個を納めた木箱を直接確かめたところによると、この角柱形の木箱には謙

齋自身の筆で、「西洋茶碗並西洋箸入。元治元年甲子四月於箱館魯西亜旅館 魯西亜僧ニコライ与之木村光永」と書かれているとのことである(15)。

また、『地天老人一代記』(16-17頁)にも全く同様の記載があり、ここの写真からもその文言を読み取ることが出来る。そして、「西洋箸は紛失してしまったが、西洋茶碗は、わが家の家宝として現存している」という。

ニコライのこのような細かな「心遣い」に関しては、謙齋とは直接関係はないが、次のような話も伝えられていて参考になる。

ニコライが箱館で伝染病に罹った時、寝ずの看護をした人がいた。鷹巣町坊沢生まれの津谷市太郎という人である。この人は1902(明治35)年頃、70余歳で郷里に戻ったが、以来ずっと郷里でニコライから月2円ずつの生活費が贈られていたというのである(『秋田人名大事典』125頁中下)。「不屈不撓、勇壯敢為の人」と評されてきたニコライ(16)であったが、優しい心を持つその人柄の一面を窺い知ることが出来る逸話になっている。

## V

中村健之助氏によると、木村謙齋は大館に帰ってから「ニコライの宣教の側面援助となる働き」をしていたことが、ニコライの日記からわかるという。そして「一八九三(明治二六)年五月、東北地方巡回の旅で大館に立ち寄ったニコライは、そこの古くからの信徒モイセイ塩屋の口から思いかけず謙齋の名を聞いた」と語り、続いて1893(明治26)年5月22日のニコライの日記を次のように紹介している(17)。

「モイセイがキリスト教に引かれたのは、アレクセイ中山[大館の最初の伝教者]を知るよりも前のことで、木村の話聞いたのがきったけだったとわかった。三〇年前、わたしが函館で教わったあのせむしの木村先生である。木村はこの大館の出身でモイセイと近しかったのだ。当時木村はモイセイにキリスト教について語ったわけではない。あの頃日本人はキリスト教については、話を聞くのもこわがったものだ。木村は[函館時代の]わたしが日本語の本をたくさん持っていたとか、わたしがあるとき下品な話を聞いて怒ったとか、そんないろいろ細かい話をしたのだという。主の与え給う運命は測り知れない。目に見えない細い糸で結ばれて、人は救いの道に導かれて行く。」

謙齋の取った行動(むしろ生き方)が本当にハリストス正教の「宣教の側面援助」になっていたかどうかは分からない。しかし、同様の話が『日本正教傳道誌 卷之貳』にも伝えられている。当時の日本におけるハリストス正教の状況を彷彿させる話でもあるので、以下に少し

長くなるが、この箇所の全文を引用しておこう(18)。

「此に當時(1873年、明治6年)箱館に於て、教を聴き領洗したる者の聴教の始末を記さんに、パワエル田手等は會津の人小山萬次郎なる者の宅に於て正教を講じ居りたるに、偶々其近隣に西村長吉(後、イヲアン)なる者ありしが、嘗て故郷大館に在りし頃、ニコライ司祭に日本語を教へたる木村謙齋より、正教の事を聞きたる事ありしかば、小山方に至りて、試みにハリストス教の講義を聴聞したるに、此時パワエル田手は、神の存在の事を説き、次て世界開闢の事を説きたり。西村は世界開闢の説を聞き、始めて其眞理を認め、教義を調べて遂に領洗せり。然るに其後イヲアン西村の實父も亦領洗したるが、未だ教理を充分に解せざるより、唯一の眞神を信じ居りながら、又偶像をも尊信するの風習を脱せざりしかば、イヲアンはこれを憂ひ、其偶像の入れある箱を破りて偶像を棄て、實父の迷を解かんとせり。然るに實父は此事をイヲアンの妻の實父なる太田某に告げたるに、太田は大に怒り、もしイヲアン西村がハリストス教の信仰を棄てざれば、其妻を去るべしと迫りて、太田は遂に其妻を自家に引き取りたり。イヲアンは傳教師を訪ひ、(偶像を破毀したるの事實を傳教師に告げなば、其暴行を譴責せられん事を思ひ、此事實をかくし)妻の父・太田がイヲアンに迫り、正教を棄てざれば妻を離縁すべしと強ふるの事實のみを告げたり。然るにパワエル岡村は、妻のために眞神を棄るも、又眞神を信ずるがために、迫害を受けて止むなく其妻を去るも、イヲアンの自由なるべしと告げしかば、イヲアンは假令其妻を去るも正教に反く能はずとて、主ハリストスを信ずるの信仰を變ぜざりしかば遂に其妻を離縁せられたり。」

ニコライと別れて帰郷した謙齋が、現代風に表現すれば、ニコライの宣教に対して「後方支援」とも言うべき活動を行っていたことは明らかであり、それはまた、謙齋がいかに深くニコライという「巨人」を見抜く眼力を持っていたかを示す格好の証左でもある。

と同時に、この資料からはまた、新しい信仰の伝播・浸透が日本古来の風習や生活をどのように破壊していったかを窺い知ることができよう。しかし、日本のハリストス正教は、他の外来宗教とその宣教方法を異にして、やがて日本的な家族制度の中に浸透し、これを温存する方向へと転じていく。

とまれ、少なくとも、箱館で別れて以来、一度も相見ることのなかったニコライが、謙齋には忘れ得ぬ人として、常にその胸に消えることのない面影を留めていたことは確かなようであり、同時に、謙齋がそのニコライの面影を周囲の人々の心にも焼き付けようとしていたこともまた確かなようである。しかし、それは正教の教義を広めようとする意図の下に行なわれていたかどうかとい

うこととは全く別の問題であろう。

謙齋という人物の生涯の中で最も疑問に思われることの一つは、何よりも謙齋が正教の教義にはっきりとした興味や関心を示していないということである。謙齋はついに正教徒にはならなかった。

謙齋は、キルケゴールと同じ「肉体の刺」を持って生まれ、おそらく人一倍辛く苦しい青春時代を送ったはずである。そして、その肉の刺はまた、心の刺ともなって、謙齋の心の奥底からいつも謙齋を苦しめ続けていたはずである。また、秋田大館藩のお抱え医師として、更に、箱館にあっては軍医として、目まぐるしく変化する世情や争いなどの中で、多くの人々の苦悩や死をも体験してきたはずである。従って、正教信仰の問題は一先ず措くとしても、キルケゴールと同様、その心が宗教的な救いへと向かう素地は充分過ぎるほどあったものと考えてよいだろう。しかし、少なくとも「表面的」に見る限り、謙齋は宗教的なものに救いを求めてはいない。なぜであろうか。この問題を少し考えてみよう。

①. 未だ切支丹禁制下にあったため、迫害を恐れてのことであろうか。事実、いわゆる「浦上四番崩れ」は明治維新前後に起こっている。しかし、その後間もなくして入信する澤邊琢磨や仙台藩士達に比して、この頑固に自らの信念を貫き通している謙齋に、迫害へと立ち向かう勇気や熱意がなかったため、などとは決して言い得ないだろう。

それとも、家族一同や周囲の人々に類が及ぶことを恐れてのことであろうか。病院を設立して人々を救うことに半生を賭けたほど humane な謙齋であるから、これは最もあり得る理由の一つであるように思われる。特に、ハリストス正教の場合、一家の家長が入信すると続けてその家の者の全員が受洗するというのがごく普通の入信形態であった。いわゆる家族ぐるみの入信である。しかし単に近親者に対する配慮のみをもって、謙齋の態度を理解しようとするのは、あまりにも早計過ぎるのではないだろうか。上に見た逸話などが示すように、何よりも先ず謙齋は自己の信念に誠実な人であった。

②. ニコライの説く正教信仰の内容そのものが謙齋には同意出来なかった（あるいは、その後の生涯を賭けるほどには納得出来なかった）からであろうか。確かに、すでに見てきたように、ニコライと箱館で別れて帰郷した後の謙齋には、ハリストス正教の教えを語らず、かえって、ニコライという人物の偉大さそのものを伝え残そうとしていたような「フシ」がある。しかし、ニコライ自身は宣教師であり、従って、ニコライと正教信仰とを切り離して考えることは不可能であろう。もし謙齋がハリストス正教の信仰内容に同意も納得も出来なかったとしたならば、なぜあれほど謙齋はニコライに傾倒し得たの

か、そして、なぜ二人の間にあれほど親密な尊敬と信頼の関係が生まれ得たのか、それを遂に理解することはできないことになろう。

③. ニコライは日本が未だ禁教下にあるため、相手の身を慮って、やがて来るであろう解禁の日まで、自己の生きる信仰については周囲の人々に（特に謙齋らには）語らなかつたのであろうか。しかしこの推測には次のような反証があげられてよい。すなわち、――

「若きニコライが、あこがれの地函館に着いたのが、一八六一年六月二日（文久元年六月十四日）のことであった。そして九月には早くも十六人もの聴教者が彼の近くにあったというから、彼の伝道への熱意の一端がうかがえるかもしれない」というのである(19)。

本当に「十六人もの聴教者」があったかどうかは確認し難いが、しかし、ニコライが決して宣教活動を行っていなかったなど考えるのは明らかに間違いであることが理解されるだろう。

更に次のような逸話さえも伝えられている(20)。

ニコライは箱館で謙齋ばかりでなく、さまざまな人に日本語を学んだ。例えば、志士の山東一郎、金沢出身の嵯峨寿安、後に同志社を創設した新島襄などである。ニコライは、彼等から単に日本語を学んだばかりでなく、「心機相通じ」と「国語の交換教授」まで行っていた。そして更に、柳田藤吉の塾にまでも通っている。もっとも、これはニコライからの一方的な塾通いだったらしく、外国人宣教師の出入りに困惑した柳田が「ロシアの坊主これより入るべからず」と英人のブラキストンに書いてもらった英文の貼り紙をしても、それをはがして平然と登塾していたという。

「外国人を嫌い、事があれば斬って捨てようとする日本人もいた時代」であった。このニコライの何ものにも恐れない堂々とした、熱意の漲る勉学の態度に、ニコライが禁教令に遠慮して宣教活動を中止していたなど考えることは困難である。おそらく、信頼できる日本人に対してならば、事ある毎に機会を捉えて、情熱的に自己の信仰を語っていたと考えることの方が一層自然なのはなかろうか。（そして謙齋はその「信頼できる日本人」の一人であった）。事実、例えば、禁教下の最も厳しい状況の中でさえ、ニコライは澤邊琢磨らに対して正教の信仰を説き、やがて澤邊を含む三人の日本人に洗礼を受けているのである。新島襄の国外脱出に反対した時に、ニコライがとった態度もまさにこのような態度であったものと思われる（後述）。

ニコライが、謙齋に対しても自己の生きる正教の教義や信仰を口にしなかつたはずはなく、肝胆相照らしていたニコライの語る言葉に謙齋の心が反応しなかつたはずもない。それにも拘らず謙齋は入信しなかつた。なぜで



あろうか。この「ナゾ」は今のところ「ナゾ」のままにしておく外はない。ここでもまた、木村謙齋という人物は、一個の巨大な「ナゾ」として、どこまでも我々の探求心を刺激して止まない人物であり続けるのである。

## VI

さて、若き日のニコライが日本語及び日本文化の研究に傾けた情熱の物妻さは夙によく知られているところであり、その一端については、すでに見て来てもいるが、もう少しこの点について考えてみることにしよう。

ニコライの日本学習については逸話が多く残されている。そして、次の逸話もよく引かれるものである。

「ある年、函館の書肆が閉店するといふので、ニコライ師は其書庫全部を買取って、教會の図書館に保存されたその書を見ると法華經、日本外史、其他の諸書の欄頭に紫の鉛筆で露文の細書がある。甚しきは十返舎一九の戯作、道中膝栗毛にまでも欄外に露文の批評が書いてある」。(しかし「かうした批評までついている貴重の蔵書は惜いかな大正十二年の大震災に悉く烏有に帰してしまつた(21)という)。

こうした驚くべき努力によって、ニコライの日本研究は次のような結論に達していった。先ず、日本語そのものについて、ニコライは次のように語る。

「日本に着くとわたしはあらん限りの力を注いでこの国の言葉を学びにかかりました。この未開野蛮の言葉に慣れるまでは随分と時間もかかり苦勞もしました。これは間違いなく世界で最も難しい言葉です」(22)。

ニコライは日本語の勉強によほど苦しんだらしく、日本語そのものを「未開野蛮の言葉」と捉え、「世界で最も難しい言葉」と評している。しかし、日本文化、特に宗教や思想に関しては、かなり好意的な見解を取っている。以下にその一例を見てみよう。

「従来の日本の教は神道佛教儒教の三教であった。此等の教は例へば三人の子守の如く日本國民を教養して善を教へたのである。(中略)神道の教は日本國民に心を清くすることを強く教へた。之によりて日本の人民は正直な清い心が養はれて居るのであります。日本人は慈愛の心に富んで居る者が多い。之は佛教に養はれたのである。又日本人は禮が厚い。之は儒教から来たのである。(福音新報・第三百四號)」(23)。

日本の在来宗教に関する(ニコライにとっては儒教もまた一つの宗教であった)このような好意的な理解によって、やがてニコライは次のような結論へと導かれていく。すなわち、「日本の文化と歴史の全体を概観してみると、「日本の文化と歴史は全体として、日本がキリスト教を受容するに至るための準備期間となっている」とい

うのである(24)。

無論、これはかなり「我田引水」的な結論であろう。自己の信仰するハリストス正教(キリスト教)を日本國の國教にしようと熱い思いを抱いて来日したニコライであった。その熱い思いが、かえって「日本の文化と歴史の全体」の方向を見誤らせてしまったとしても、それは決して責められるべきことではないだろう。むしろ我々自身の文化と歴史の全体がこのような解釈をも「一つの」(決して「唯一の」ではないが)あり得る解釈として許すことが出来るような幾分かの素地を自らのうちに持って成り立っていたことに注意すべきなのかもしれない。そして、このような解釈を行なうための基礎的素養が、(たとえその一部であろうとも)、もし木村謙齋等の日本語教師達によってニコライのうちに培われて来たのであるならば、そのことへの歴史的な考察と反省を怠って来た我々自身の研究の怠慢の方がむしろ責められるべきなのかもしれない。ニコライの日本文化観によって気付かされる、我々の「先覚」達がくっきりと描き残して来た日本の文化と歴史の動向への深い洞察という轍の後を、我々はもう一度しっかりと辿り直してみる必要があるのではなかろうか。

とまれ、ここには、日本の文化と歴史に対するニコライの考え方が典型的に表現されている。ニコライが学んだのは在来の宗教の教義そのものではなく、それを通して知ることの出来る日本人の心性そのものであった。そしてニコライのこのような解釈は、やがて日本ハリストス正教のその後の発展の方向を決める基本的な考え方ともなっていくのである。

## VII

ところで、ニコライは日常会話などでは、一体どのような日本語を喋っていたのだろうか。ニコライは「話しことば」の場合、「津軽弁から熊本弁まで聞いて分かった」という。そして、「四國の農村では「けれども」を「けんども」と言うとか、九州では「かしらわかった」と言うので一瞬とまどったが、それが「最初わかった」という意味だとわかったとか、地方のことばの細かな特徴にも敏感に反応して」いたという(25)。これは、日本語会話の驚くべき理解力であったと言わざるを得ない。我々日本人をも凌ぐものであった。しかし、ニコライ自身が喋る話し言葉の場合はどうであったのだろうか。

ニコライの話す日本語には「北方方言の強い訛」のあったことが夙に知られていた。このことについては、例えば、「大主教のアクセントには外国人らしい強いくせがあった。それに加えて八年間も函館にいたために、その発音には日本の北方方言の強い訛が入っていた。しかし

それは少しも理解の妨げにならず、彼の語ることは大人から子供まですべての日本人に理解され、豊富な語彙とらしくとフレーズを作る能力によって、彼の演説は力強いものになり、すべての日本人を驚喜させた」という、よく引用されるボズニューエフの有名な証言もあるほどである(26)。

しかし、この「北方方言の強い訛」がどのような訛りであるかと問うことは愚問であろうと筆者は長い間思ってきた。来日したニコライに最初に日本語を教えたのは秋田大館の「木村謙齋」であるというのが、ほとんど誰もが認めてきた事実であったからである。従って、ニコライが喋る言葉には「秋田弁」の訛りがあったろうと単純に思い込んでいたのである。

中村健之助氏もまた、同様の思い込みをしていたらしく次のように書いている。

「ボズネーエフが指摘しているニコライの「日本の北方方言の強いなまり」については、私は木村謙齋からの秋田弁かと思っていたが、長く函館のハリストス正教会司祭を努めた厨川(クツカワ) 勇が、それは「南部弁」であったと、日本の信者に伝えられたおもしろい話を書いている」と語り、続けて厨川勇著『函館ガンガン寺物語』から当該箇所を引用している(27)。

たとえ間違っていたとしても、思い込みを共有する人がいたというのは、何となく楽しい気分になるものであるが、しかし、この思い込みが間違いであるのはどうやら確かなことであるようなので、この問題について、もう少し考えてみることにする。先ず、中村氏も引用する厨川勇の証言から見ていくことにする。ニコライが日本語の会話を勉強し始めた前後の関係を知らるために、中村氏の引用よりも少し長くなる。

「ニコライ神父が箱館に来たのは一八六一(文久元)年で(中略)、まず最先に日本語会話の勉強である。鈴木富治など日本人の使用人も領事館にいたが、彼らはそれぞれに仕事をもっており、また身分の違いもあるので彼らを会話の師匠にはできなかった。(中略)ニコライ神父が来たばかりの頃は、隣といえば南部陣屋と称する南部藩の兵営で、藩兵の大部隊が撤兵したあとも建物はそのまま、少数の藩兵と留守をあずかる人たちとそれらの用達をする人たちが住んでいた。

領事館で建築工事その他で雑用を足してくれる人手が欲しい場合、その供給源にもなってくれるのがこの南部陣屋である。陣屋のジッチャ、陣屋のバッチャなど、特に老年の人たちは気軽に彼ら仲間でロカンとかロクカン(露館)と称していた領事館にやって来るのであった。

ニコライ神父の会話の教師はまず南部陣屋のバッチャであった。したがってニコライ神父の日本語の初歩は南部弁からであった。正しい発音に直そうと努力しても、

初めにおぼえたなまりはなかなか直らないものである。何十年たっても、主教になられても、アディーン(ひとつ)はフドーツ、ドゥアー(ふたつ)はヒタツツ、カレーノ(膝株)はフジャカブであった。

「主教さん、フドーズではありません。ヒトツです」

「いや、フドーズです。アンナ教えました」。陣屋のバッチャは後に洗礼を受けて霊名をアンナといった。」(28)。

厨川勇のこの話は、信徒仲間には、かなりポピュラーであったらしく、例えば、金石仲華の『ニコライ大主教の弟子 鈴木九八伝』の中にも、その反響を聞き取ることができる。

「・・・ニコライ師の日本語には(鈴木)九八の故郷盛岡の訛りがあった。九八はニコライ師に大いなる親しみを感じたに違いない。

厨川勇神父が函館の古い信者から聞いたところによれば、ニコライ師は「一つ」「二つ」のことを「フトツ」「ヒタツツ」と発音し、膝株(膝小僧)のことを「フンジャカブ」と発音していたとのことである。「サシスセソ」が「スススス」となりがちで、「お主(ヌス)」と呼びかけられたとのことである。

(中略)

これはニコライ師が函館時代、日本語を学んでいた時に接した人々に東北出身の者が多かったことに由る。

最初の日本語の教師木村謙齋は大館(秋田県北部)の人であった。次に日本語の会話を学んだ相手はアンナ小野である。彼女の夫は酒造業のイオアキム小野治助である。二人とも盛岡からの移住者であった。

おまけに最初の信徒は仙台出身の士族が多かった。そもそも函館の住民のほとんどが、東北地方から流れてきた人々であったのだ。

ニコライ師の日本語に東北の訛が入ってくるのは自然なことであった。

故郷の訛があるニコライ師の日本語を聞き、九八がこの世で最も尊敬する人物に畏れよりも親しみを感じたことは十分に考えられることである」(29)。

もっとも、筆者の秋田における体験から言えば、「フトツ」「ヒタツツ」「オヌス」などという発音が、秋田の人から全く聞かれないというわけではなく、金石仲華の証言にもある通り、ニコライの北方方言訛りが純粹に南部弁であったとは言い難いであろう。従って、筆者の思い込みも全面的に間違いであるとは必ずしも言い得ないようである。

とまれ、ニコライの東北訛りが、宣教に当たって、決して短所とはならず、かえって、人々に「親しみを感じ」させる長所にすらなっていたことが、上記の証言から確認できる。ニコライ自身の活動が、そして、日本のハリ

ストス正教会の伝教者達の活躍が、その明治の発展期において、とりわけ東北地方出身の人々から圧倒的な支持を得て、信徒数を増やしていった理由の一つは、案外こんな「言葉の親しみやすさ」というところにあるのかもしれない。

なお、最初期の正教入信者のほとんどが、新しく誕生しつつあった明治国家、薩長政府に対して不平・不満を持つ東北地方の下級武士達であったとされる(30)。そして東北地方に次世代の資本主義的中産階級が育たなかったために、初代の信徒の信仰を受け継ぐ社会層が形成されず、そこに正教会が急速に発展しながらも、また急速に衰退していった原因の一つがあるともされてきた(31)。

しかし、日本ハリストス正教会には、「ジッチャ」や「バッチャ」に受容されるような信仰という極めて庶民的な要素も存在していたのではなからうか。それはまた、多分、ニコライの日本語教師になるような人物でも、あるいはまた、「心機相通じて国語の交換教授」を行なうような人物でも決してなく、「雑用を足してくれる」人達、「気軽に」領事館にやって来る人達が心底から受容するような信仰であったはずである。

1864(元治元)年4月に「箱楯」の地を踏んだ新島七五三太(しめた:後の襄)は、「仙台、南部、秋田、津軽、會津侯等の屋敷あれど、皆少にして士人も格別は居らざる由」と日記に記し、「此地の風俗」が「甚悪」いことを嘆いている(32)が、箱館時代のニコライの日常生活において、ニコライと接触を持った人々のうちには、武士階級の出身者達というよりも、むしろ庶民階層の人々の方が圧倒的に多かったものと思われる。そして、日本に眞の正教信仰を継承し展開させていったのは、このようなジッチャやバッチャ達だったのではなからうか。

更に言えば、現在もなお、急速な衰退を心配されながら、この正教会の存続を細々と、しかも力強く、維持しつつあるのは、このような「草の根」的な根強い庶民の信仰なのではあるまいか。もし本当にそうであるならば、いま我々は、研究の最も根本的な点において、今日までの日本ハリストス正教史研究に、これまでにない厳しい反省を迫られることになるだろう。

## VIII

ところで、なぜニコライの喋る日常会話の東北訛りの中に、南部弁は顕著であったとしても、秋田弁は(仮にそれがあったとして)南部弁ほどに明瞭ではなかったのだろうか。すでに見てきたように、ニコライの最初の日本語教師は秋田大館藩の木村謙齋であった。謙齋が日常使用する言葉が秋田弁ではなかったと考えることはできない。謙齋の生育や活動の略歴を見る限り、箱館は別と

して、ほとんど大館もしくは秋田を出ていないからである。少なくとも、会話に地方的な影響が出るほど長く秋田以外のどこか他の地域に住んでいたことがあるという記録はない。またニコライが日常の喋り方において、謙齋から何の影響も受けなかったということも考えにくいことである。

もしそうであるならば、考えられることはただ一つ、謙齋は陣屋の「ジッチャ」や「バッチャ」のような気軽さで、ニコライとの日常会話を行なってはいなかったということだけであろう。

謙齋は優れた儒学者であり同時に教育者でもあった。様々な地方から集まって来た塾生達を前にして、その塾生達の誰でもが理解できるような言葉を用いて語ったはずである。(事実、当時の函館には全国各地から青雲の志を抱いた青年達が集まって来ていた)。また、儒学者として「親しき仲にも礼儀あり」という儒学的生活信条を貫いた生き方をしていたということも充分に考えられることである。たとえ相手がどれほど親しい人であったとしても、いや、相手が親しい人であればあるほど、むしろ、謙齋は礼節を重んじ、相手を尊敬して、決して分かりにくい秋田弁ではなく、どのような相手にも理解できるような言葉を用いて語りかけていたのではなからうか。要するに、謙齋は当時、様々な地方からの出身者が多かった箱館において、その箱館地方の人々に共通して分かり合えるような言葉を喋っていた、すなわち、相手が誰であろうと理解し合えるような(あるいは、聞き分けられるような)日本語を話していたと考えられるのである。もしそうであるならば、そのことは謙齋の優れた一つの「見識」を示すものであり、そして、もし「親しき仲」のニコライに対しても同様に礼儀をわきまえた喋り方をしていたならば、ニコライの話し言葉のうちに秋田弁が明瞭に聞き取れなかったということは、まことに自然のことであり、我々にとってもまた、十分にうなずけることであろう。若き日のニコライに秋田弁の影響を与えなかったというのは、謙齋がニコライに対する人格的な影響の少ない矮小な人物であったということでは決してなく、むしろ、木村謙齋という一人の優れた人格の優れた個性の一つがそこに現われているということでもあるのである。すなわち、ニコライの日本語に謙齋の特異な影響が見られないという事実は、決して謙齋の卑小さを示すものではなく、かえって「木村謙齋」という人物の偉大さを示すものだったのである。

ちょうどここに、我々はいま、木村謙齋とは誰であるかというここまで問い続けてきた問題に対して、あるいはまた、親しき仲にも礼儀を保ちつつ、己れの信念を貫き通して来ながら、ついにニコライとは正教という信仰を共有することがなかったというあの謙齋の「ナゾ」に

対しても、一つの解答を得るために必要な、小さな手がかりを一つ見出だすことができたのではなからうか。

## IX

さて、先に見たように、謙齋一家は1864（元治元）年に箱館を引き揚げて帰郷する。以来ついにニコライと出会うことはなかった。ちょうどこの時期、箱館のニコライの許には多くの逸材が入り出ていた。彼等の中には、その後の日本文化史に大きな足跡を残した人物も数多く含まれている。その中でとりわけポピュラーになった人物に新島七五三太がいる。すなわち後に同志社大学を創立し、日本組合キリスト教会を設立した新島襄（1843－1890）その人である。この新島が、謙齋の後を引き継いでニコライの勉強を助けることになる。ちょうど謙齋に去られたニコライも、謙齋に代わる日本語と日本歴史の教師を求めている。たまたま二人の要求がうまく一致したわけである。新島はニコライに日本語と日本の歴史を教え（一緒に『古事記』などを読み）、ニコライからは英語や世界情勢を教えられたという。

ニコライと知り合って以来、新島はずっと、ニコライの居宅に下宿して「至れり尽くせりの待遇」を受けている。この寄宿は新島が海外へ脱出するまで続いた。その間に新島の目に映った「魯西亜人ニコライ」は、「大学者」であり、「大部親切に世話いたし呉」る人であり、「英学もでき」る人物であった。そのことは新島が父に宛てた手紙において確認できるという。こう報告した後、岩間正光氏は、「ニコライが、宗教家というよりも、学者として新島に映じた点非常に興味深い」と感想を述べている(33)。

従って、次にこの間の事情を直接、新島襄自身の日記や書簡類によって少し確認しておくことにしよう。

1864（元治元）年4月に箱館に入港した新島は直ぐに「西洋人の家に至らん事を企て」て、二十八日には武田塾の塾頭で長岡藩士の菅沼精一郎に「西[洋]人の家に食客たらん」ことを相談する。そして、この日の日記には次のように記されている。

「彼の答ニは、予魯国の僧官ニコライなる者を知れり。此人英敏ニして博学なり。其故か魯帝の命を受け茲に来り日本語を学へり。此人近来日本語の師を失ひし故頻に其師を求めり。汝なんそ魯僧の家ニ至らざる哉、且此人英語ニも通せし故、汝の英学を学ふに少しハ助けとならん。予意を決し其家に至らん事を頼めり。」

そして早くも「(五月)五日の夜六ツ時過に荷物を持其家に移れり。彼予ニ十畳引[敷]き計りの一と間を預け、のみよけの如き高き床と、大なる読書机を借せり」と言い、更に「彼、予の英学に志し遠路を嫌わず单身此

地に来るを喜ひしにや、予を待[遇]する事実ニ至れり尽せりと云ふへし」と記している(34)。

西洋式のベッドを「のみよけ(蚤避け)」と考えたのは何とも微笑ましいが、実際、ニコライの待遇は「至れり尽くせり」で、新島も大いに満足していたようである。そして、二人は間もなく日本文化の勉強を開始する。

五月八日の日記に「今日よりニコライと共に古事記を読始めり」とあり、以後の日記には「古事記を読む」という記述が幾度も出て来る。そして、五月二十七日には「ニコライとこの日より大伴金道忠孝図会を読む」と代わり、この読書会は、その後更に二回ほど行われたようである。

しかし、六月十四日にはもう、この夜四ツ半[午後10時]過ぎに「一とからけの荷物を負い、大小を懐中にかくし」て密かにニコライの家を出ている。そして、アメリカ船ベルリン号に乗って、翌十五日には箱館を出奔した(35)。

この間のニコライとの関わりについては、同年五月二十五日に故郷安中の父親、新島民治に送った書簡の中で、新島は次のように報告している。

「魯西亜人ニコライと申大学者の家江寄宿仕修行仕候、此人は大分深切に世話いたし呉候、且此人は英学も出来、日本語も出来候故、大ニ都合よろしく候、而して毎度申候ニ（おまるさんの了簡若き人ニにやわす決し而遊びにも不参候故、私幾重ニも御世話いたし、御帰郷之節は沢山上々の錦をさせ御帰へし可申候）様申聞ケ、此節は毎夜すゝみに出て、色々のハなし且国々の様子拝教へ呉候間、何卒私修業之義は御心配被下間敷様奉願」(36)。

また、この書簡を父親に書く前日に新島はニコライに対しても自分が箱館にやって来た理由を伝える書簡を書き送っている。次のように言う。

「私義今度江戸表より当地へ参候ハよの義ニ無之、外国の人々に交はり、自分の行儀は勿論、国を治むる道なと承らんとそんし、私の主人も親も許さざりしが、色々と申立、よふやく当地へ参る事を得、はからずも貴殿の御世話に相成候は、実には平生の願ひに相叶ひ、心の喜びいハん方も無之候」(37)。

新島にとって、ニコライは英学も日本語も出来る「大学者」であり、深切に世話を致してくれる、大いに都合のよろしい人物であった。

また、新島が箱館に来たのは「自分の行儀」と「国を治むる道」を学ぶためであったという。この「国を治むる道」については、当時のほとんどの青年達が心に抱いていた「大志」であったろうから問題はないが、「自分の行儀」を学ぶという点になると、その意味内容の解釈に微妙な問題が出てくる。そもそも、ニコライのハリストス正教との出会いが菅沼精一郎の斡旋による偶然的な

ものであったとしても、なお新島はその最初から一般に基督教を学ぶという意図を持って来箱したのだろうか。

この問題にかなり肯定的な回答を与えている作品がある。比屋根安定著『日本近世基督教人物史』がそれである。そこでは次のように語られている。

「新島は、長じて海軍傳習所にて航海術を研究中、偶々漢譯聖書を發見し、大いに啓發された。函館へ赴いて、更にこれを研究しようと志し、元治元年函館へ渡り、ハリストス正教會のニコライに就いて、少しく學んだ。洋學研究のため、海外遊學を企て、脱出してボストンに着した」(38)。

この資料が伝えるように、新島の来箱の目的は、聖書の継続的な研究にあったのだろうか。しかし、新島はニコライという折角の好機を振り捨てて、洋学研究に日本を脱出していく。この当時の新島にとって、聖書の研究は、未だその人生に二次的な意味しか持っていなかったものようである。

とまれ、新島裏の目に映ったこのニコライの「学者」然とした姿を考えてみると、そして更にそれに加えて、やがて劇的に展開する澤邊琢磨等の入信の出来事などを考え合わせてみると、そこには、日本ハリストス正教會の持つ一つの特異な性格が浮かび上がって来る。

ニコライを信頼した新島が、国禁を侵す国外脱出の計画をニコライに打ち明けた時、ニコライは反対して、英語だけでなく「聖書」(多分、キリスト教信仰)のことも教えるから箱館に留まるようにと説得したが、新島はこれを受け入れなかったという。この頃の青年新島にとっては、未だ聖書やキリスト教に対する心情的な関心よりも、学者として海外の文化や世界情勢を研究し、「国を治むる道」を学ぶことに対する知的な関心の方が、より強いものであったことが知られるのである。新島もまた、たとえ帰国後に新しく日本的なキリスト教を導入したとはいえ、寄宿して生活を共にしながらも、木村謙齋と同様、ついにニコライによって、ハリストス正教の信徒となることはなかった。その理由の一つは、おそらく、この異国人との遭遇によって生じた未知の世界の異文化や異文明に対する知的な関心が何にも増して優先していたという、そのあたりにあるのではなからうか。

新島は国外脱出後(帰国後もまた)、ついにニコライと出会うことはなかった。しかし、ニコライが「関西、中国、九州を巡回旅行して同志社の勢いを感じていた記事は日記に何度か出てくる」という(39)。

とまれ、新島が国禁を犯して箱館から米国船で脱出したのは1864(元治元)年7月17日の夜のことである。この新島の危険な企てを助けて成功させた人々の中に憂国の志士澤邊琢磨がいた。この時、未だ澤邊はニコライと識り合っていない。ニコライの後ろ姿くらいは見えてい

たろうが、二人は未だ「相識の仲」ではなかった。

しかし、新島が国外に脱出して1年後、すなわち、1865(慶応元)年に、あのニコライと澤邊琢磨との劇的な出会いが起こる。更に3年後の1868(慶応4)年4月には、澤邊を含む3名の日本人がニコライから密かに受洗して、日本ハリストス正教會発展への輝かしい第一歩を印すことになるのである(40)。

## X

この新島裏の例に見られるように、最初、ニコライの許に集まった人々が求めていたのは、必ずしも宗教的・聖書的なものではなく、学究的・学問的であったり、政治的・憂国的であったり、時にはひどく現世的・打算的であったりしたようである(41)。無論それは、佐久間象山が「東洋の道德、西洋の芸術(科学技術)」と語り、横井小楠が「堯舜孔子の道」と詠いあげた、あの幕末・明治の日本人が異文化としての西洋文明を受容する際に取った最も基本的な態度であった。

佐久間象山は『省嘗録』において「君子に五の楽(たのしみ)あり」と語り、その第五の楽しみを「東洋道德、西洋芸術(技術)、精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもつて民物を沢し、国恩に報ゆるは、五の楽なり」と説明する(42)。

また、横井小楠は『沼山閑話』において「三代の治道(堯・舜・孔子の道)を講じて西洋の技術を得て、皇国を一新し西洋に普及せば、世界の人情に通じて終に戦争を止むることいかに成る可なり。此道本朝に興る可し」と主張する(43)。

欧米の科学技術や機械文明は生活に役立つ素晴らしい価値として称賛し、受容する。しかし、日本人としての魂は決して同化させない。日本人としての identity を捨て去ることは決してしない。出て行って彼岸の水に馴染むよりも、引き寄せて此岸の水に馴染ませる。頭にコスメチック、脚に股火鉢。二階が和室、一階が洋間。しかも、そこに何の矛盾も感じないまま生きて、水と油にも似た二つの働きを否応なく黙らせ、仲良くさせてしまう「平和」の原理。それが近代日本文化形成の基本的な原理であった。

かつては日本人的思想の「曖昧性」「雑居性」などともっぱら非難され、中傷されながらも、執拗に日本人の魂のうちに作用し続けてきた原理。そして今、世界各国文化の国際化が急速に進展するなかで、その重要性がようやく認められるようになった原理。それは、幕末・明治の日本人が現代の我々に遺してくれた掛け替えのない貴重な文化遺産であった。我々はいま、その認識を怠ってきた我々自身の怠慢と不明を恥じなければならない。

今度こそ我々は優柔不断であってはならないだろう。

とまれ、この道徳観、文明観を支えた原理は、明治の日本が異文化を受容する際の最も基本的な原理であり、後に一般的には「和魂洋才」として捉えられてくる原理でもあった。そして、この原理は幕末からすでに佐久間象山や横井小楠等の知識人達に現われて、野望に燃える青年達の心に力強く働きかけ続けていたと言ってよい。

更に言えば、幕末・明治の日本人が出会った基督教は、無論、和魂でなく、洋才でもなく、「洋魂」であった。日本人は外国人を理解する手掛かりを求めてはいた。しかし、みずから外国人になる心算は全くなかった。当時の日本人は、日本国を欧米国並みに文明化することは求めていた。しかし、日本人を欧米人に変えることは求めていなかった。まさにそこに日本人としての誇りと自負、すなわち「和魂」の神髄があったのである。当時の日本人の生き方にこの「和魂」の原理が働いていたという事実を知るには、基督教に関してさえ、例えば、内村鑑三ら、最初期の基督教徒達が、日本的基督教、武士道的基督教を生み出そうとして引き受けざるを得なかった長く激しい努力と苦悩を思い起こせば足りるだろう。

そして、すでに見てきたように、木村謙齋もまた、逸話などが端的に示すような「和魂」を生きながら、「洋才」としての医学の効用をいち早く察知して近代的な病院の設立に向かって積極的に努力しつつ、文字どおり、「和魂洋才」を生き抜いた典型的な明治人（すなわち伝統的な日本人）の一人だったのである。

もしそうであるならば、本小論がここまで「ナゾ」としてきた事柄、すなわち、木村謙齋が正教信仰を受け入れることなくニコライに傾倒し得たという事実は、ちょうど新島襄の例にも見られるように、当時の人々には特殊な生き方の事例などでは決してなく、まして「ナゾ」などでも無論なく、むしろ当時の人々が生きたその生き方の典型を、とりわけ優れた一つの典型を現わしていたと言ってよいのではなからうか。すなわち、これまで本小論が、ずっと「ナゾ」として扱ってきた木村謙齋の生き方は、決して「ナゾ」などではなくて、むしろ幕末・明治の知的日本人が動乱と激変の中を生きたその生き方の、まさに一つの「典型」だったのである。普遍的な明治の時代精神が、秋田という一地方の地に謙齋という一人の「先覚」となって自己を実現したとでも言うことができようか。そして、それは「努力し、忍苦し、行動する人間」という「普遍」が、木村謙齋という一つの「個性」として一地方に出現した日本歴史における希有な事例の一つでもあったのである。

一方で、確かにニコライは謙齋と邂逅後、東京に出て神田駿河台に東京復活大聖堂（ニコライ堂）を建て、ハリストス正教会の本格的な布教を開始し、やがて日本キ

リスト教史に不滅の業績を残していく。従って、その活動は全国的であり、むしろ世界的ですらあった。

その意味では、新島襄もまた、帰国後、日本的なキリスト教を立てて、同志社大学を創設し、後に幾多の俊秀を世に送り出すという全国的（むしろ世界的）な活動を行なっている(44)。

しかし、他方で、木村謙齋は帰郷後、故郷で医業や私塾を営む傍ら、秋田に私立大館病院を創設して後、69歳の生涯を終えており、その意味では、その活動は一地方的であった。

従って、「木村謙齋」の名は、その活動の地方的性格の故に、全国的・世界的な業績を残したニコライや新島襄のように、決してポピュラーにはならなかった。しかし、ニコライとの関わりにおいて、あるいは、新島との比較において、すでに見てきたように、謙齋の信念と活動の生涯は、幕末・明治の日本人の、決して一地方的な特殊な事例ではなく、優れて一つの典型的なそれであった。我々は、地方的であってしかも全国的であり、特殊的（現実的）であってなお普遍的（観念的）であるような生涯の軌跡を、現代の我々に残してくれたところに、木村謙齋という一つの人格の持つ優れた「一つの個性」を見出だすことができるのではあるまいか(45)。

## おわりに

筆者は秋田大学教育文化学部研究紀要第56集に「日本人の入信動機の特質に関する一考察」を発表し、澤邊琢磨の入信の動機とその後の信仰に基づく活躍とを、幕末・明治の知的日本人の一つの典型として考えてみた。

今ここに、木村謙齋の生涯の生き方を取り上げてみたのは、そこに、同じ正教信仰に触れながらもついに入信にまでは至らなかった、幕末・明治の知的日本人の生き方の「もう一つの典型」を見て取ることができるのではないかと考えたからである。

しかし、この「もう一つの典型」と対話することを通して、我々自身は一体何を求めてきたのだろうか。また、何を得てきたのだろうか。

人は多くの「先覚」達と対話を繰り返しながら自己を形成していく。たとえそれが「観念の世界」だけのことであったとしても、一人でも多くのそのような「先覚」を持つことは、我々自身の一つの「幸せ」となるだろう。そこでは、自己の「卓越性（徳）に即して生きた魂の活動」と触れ合うことによって、共に成長できる自分というものを見出だすことができるはずだからである。

従って、たとえその生涯の活動が一地方的に限定されていようとも、その人間の魂の努力と忍苦と行動とが、木村謙齋のそのように、真に普遍的な人間性の上に実

現したものであるならば、その人物との出会いは我々に掛け替えのない、アリストテレスの言う *theoria* の「幸福」をもたらしてくれることになるだろう。

更に言えば、我々は木村謙齋というこの一人格との対話を通して、むしろ、我々自身が幕末・明治の日本人とは誰であったかを理解することができるはずである。そして、それは同時に、現在の我々自身のルーツの一つが何であったかを、すなわち、今の我々が一体誰であることを認識することにもなるはずである。我々は、究極的にはそれを求めてきた。木村謙齋という一人の人間の生きざまを通して、今日までの歴史の中で、我々は一体何を、何を失い、そうすることによって、どのような「今」を形成してきたか、つまるところ、我々とは一体誰であるのかを知りたかったからである。

事実、我々は木村謙齋との対話を通して、すでにこれまでも幾つかの重要な問題点を考え、よってもって貴重な自己理解を深めることができた。それは、——

第一に、我々は我々自身のルーツの一つを形成した木村謙齋という人物について、これまでほとんど何も知らずに過ごして来ていたのではないかということである。

第二に、来朝した外国人から日本文化に与えられた影響については大いに研究されて来ていたものの、逆に、我々の先人達が海外からの人達に与えた影響が、もう一度巡りめぐって、我々にもたらされていたことの実態についてはあまり考えて来なかったということである。

第三に、正教会の場合、旧武士階級の入信者の問題は大変よく論究されながら、もっと底辺にあってこの信仰を守り続けてきた一般庶民の人々の信仰の在り方に関する研究は比較的なおざりにされてきていたのではないか、その反省を決して充分には行なって来なかったということである。

第四に、我々の先人達の営々と作り上げてきた日本人的な異文化受容の特異な遺産を、「曖昧性」や「雑居性」などとみなしてきたマイナス評価に捉われて、もっと積極的に我々自身の貴重な遺産として、プラス思考的に評価することを怠って来たかも知れないと反省してみると、我々はほとんど意を用いて来なかったのではないかということである。

木村謙齋との対話は、このようなことを、更にその他いろいろなことを我々に考えさせてくれた。そして、これからもこの関係はそうあり続けることだろう。だから、「木村謙齋」のような存在との対話を決して忘れてはならない、それが謙齋との対話を通して知ることのできた我々の最も大切な自戒である。すなわち、我々は謙齋を知ることによって我々自身の誰であったか、そして、誰であるかを（また、何者であったか、あるいは、何者でなかったかを）知ることができたのである。

本小論の前半部分において筆者が、木村謙齋は決してポピュラーではない、しかしポピュラーになってよい、と語ったのは、まさにこの理由による。

我々の先人達は何を求め、何を選んできたのか、また、それを知ることによって、我々自身は何を得、何を失っているのか。そして、その認識に基づいて我々は今後何をなすべきなのか、どう努力すべきなのか。その反省は必ずや我々にあの「テオリアの幸せ」をもたらしてくれることであろう。

このように、「木村謙齋」とはすでに我々自身のことであった。謙齋を知ることはいわゆる我々自身を知ることであった。そして、そうなる初めて、我々の語ってきた「倫理の実在論」は真に有効に機能し得たと言ってよいのではなかろうか。

[追記] 本小論を書くに当たっては、秋田大学教育文化学部の中村裕・長谷川章の両先生、並びに大学附属図書館の諸氏に多大なご尽力を頂いた。記して謝意を表したい。従って、もし本小論に何らかの価値があるならば、それらはすべてこれらの方々のものであり、もし何らかの瑕瑾があるならば、それらはすべて筆者のものであることを追記しておく(46)。

#### [註]

- (1) 拙稿「殉教者宗教としてのキリスト教」, 秋田大学教育学部研究紀要第33集, 昭和58年。
- (2) アリストテレス『ニコマコス倫理学』(高田三郎訳、『世界の大思想 2』, 河出書房新社, 昭和45年, 17頁以下), 1094a. 以下を参照。
- (3) EUDAIMONIA の語源は「良き守護神 (DAIMON) に見守られて安心を得ること」(being watched over by a good genius) であるとされている。
- (4) 拙稿「イコンの美術史的意義」, 秋田大学教育学部研究紀要第53集, 平成10年。
- (5) 『主降生一千九百年 日本正教傳道誌 卷之壱』, 石川喜三郎編纂兼発行, 日本正教会編輯局発兌, 明治三十四年発行, 24頁。
- (6) 『大主教ニコライ師事蹟』, 柴山準行編, 日本ハリストス正教会総務局, 昭和十一年, 22-23頁。
- (7) 牛丸康夫著『明治文化とニコライ』, 教文館, 昭和44年, 36頁。
- (8) 石田秀一著『秋田の医史覚え書き〈上〉』, 石田秀一発行, 平成5年, 非売品, 201頁及び207頁。
- (9) 遠藤正雄著「木村泰治 台湾実業界の重鎮」(『秋田の先覚4 近代秋田をつちかった人々』, 秋田県総務部秘書広報課編集, 秋田県発行, 1970年, 所収) 198頁。

- (10) 中村健之助著『宣教師ニコライと明治日本』, 岩波新書, 1996年, 47-48頁。なお本書46頁に「秋田久保山藩」とあるのは「久保田藩」の誤りである。
- (11) 左近毅著「嵯峨壽安」(『日本人とロシア語』, 日本ロシア文学会編, ナウカ社, 2000年, 所収), 50-54頁。  
 なお「嵯峨壽安」については、「月刊人物誌『越中人譚』第二号 [国際]」(中尾哲雄「株式会社チューリップテレビ」平成十年発行, 11-14頁)の中でも富山県議会議員の犬島肇氏によってかなり詳しく紹介されており, その最後には「壽安は君命により近代日本に裨益しようとしたが, 彼は時の政治権力から「無用者」扱いされた」(13頁)とある。
- (12) 石田秀一著, 前掲書, 207頁。なお, 本書の203-212頁には秋田の公立病院に関してかなり詳しい歴史的な説明があり, 川瀬玄探, 高瀬玄雄, 名越辰造等についても言及されている。因みに「公立病院開院時, 高階経本は月奉二百円, 川瀬玄探五十五円, 高瀬玄雄三十円, ……名越辰造十五円, 明治十七年には不景気の故を以て川瀬以下の俸給が減額されている」(208頁)という。  
 なお, 秋田魁新報社の『秋田大百科事典』, 昭和56年, 137頁では, 「私立大館病院が創設され, 3年後(すなわち, 明治15年)に公立病院」になったとしており, 石田氏の説明とは1ヶ年のズレがある。
- (13) 石井博夫著「波瀾万丈の生涯 木村泰治」(『秋田人物風土記〈ふるさとの文化人たち〉1』, 秋田県広報協会編, 昭和書院, 昭和48年, 所収) 64-65頁。
- (14) 遠藤正雄著, 前掲書, 199頁。
- (15) 中村健之助著, 前掲書, 48頁。
- (16) 柴山準行編『大主教ニコライ師事蹟』, 日本正教会総務局, 昭和11年, 16頁。
- (17) 中村健之助著, 前掲書, 48頁。
- (18) 『主降生一千九百年 日本正教傳道誌 卷之貳』, 石川喜三郎編纂兼発行, 日本正教会編輯局発兌, 明治三十四年発行, 10-14頁。
- (19) 岩間正光著「ギリシア正教と日本文化」(『山下りん 黎明期の聖像画家』, 岡畏三郎監修, 鹿島卯女編集, 鹿島出版会, 昭和51年, 所収) 99頁。
- (20) 中村健之助著, 前掲書, 44-45頁を参照。
- (21) 『大主教ニコライ師事蹟』, 前掲書, 23頁。
- (22) ポズニューエフ著, 中村健之助訳『明治日本とニコライ大主教』, 講談社, 昭和61年, 20-21頁。
- (23) 佐波巨編『植村正久と其の時代 第五巻』, 教文館, 昭和41年復刻, 895頁。
- (24) ポズニューエフ著, 前掲書, 24頁。
- (25) 中村健之助著, 前掲書, 52頁。
- (26) ポズニューエフ著, 前掲書, 24頁。
- (27) 中村健之助著, 前掲書, 52-53頁。
- (28) 厨川勇著『函館ガンガン寺物語』, 北海道新聞社, 1994年, 139-141頁。
- (29) 『ニコライ大主教の弟子 鈴木九八伝』, 著者・発行者: 金石仲華, 1993年, 54-55頁。
- (30) 拙稿「日本人の入信動機の特質に関する一考察」, 秋田大学教育文化学部研究紀要, 第56集, 平成13年。
- (31) 長縄光男「明治の正教会」(中村喜和, トマス・ライマー編『国際討論 ロシア文化と日本』, 彩流社, 1995年, 所収) 251-258頁, 特に256頁以下を参照。
- (32) 『新島襄全集 5』, 新島襄全集編集委員会編, 同朋社, 1984年, 18-19頁。
- (33) 岩間正光著, 前掲書, 103頁。
- (34) 『新島襄全集 5』, 前掲書, 19-21頁。
- (35) 『新島襄全集 8』, 同朋社, 1992年, 20-24頁。
- (36) 『新島襄全集 3』, 同朋社, 1987年, 18頁。
- (37) 同書, 16頁。
- (38) 比屋根安定著『日本近世基督教人物史』, 大空社, 1992年, 227頁。
- (39) 中村健之助著, 前掲書, 56頁。
- (40) 拙稿「日本人の入信動機の特質に関する一考察」を参照。
- (41) 拙稿「日本人の入信動機の特質に関する一考察」を参照。また, 岩間正光著, 前掲書, 105頁をも参照。
- (42) 『日本思想体系 5 5』, 佐藤晶介・植手通有・山口宗之校注, 岩波書店, 1978年, 244頁。
- (43) 同書, 517頁。
- (44) 周知のように, 新島讓の門下からは安部磯雄, 徳富蘇峰, 山室軍平, 海老名弾正等が輩出している。
- (45) 木村謙齋という人物とその生き方が幕末・明治の知的日本人の一つの典型であったという性格は, 謙齋の子の木村泰治が, 実業界において, 台湾を中心に, まさに全国的・世界的な活躍をしたという事実のうちにも見て取ることができよう。
- (46) 資料の中には現代の日本語として使用が好ましくない用語もあったが, 資料の歴史的価値を害さないために, 敢えてそのままにしておいた。記して寛恕を願っておく。  
 (補注1) 大館市在住の郷土史家, 金沢長一郎氏が, 木村泰治との関わりから謙齋についても研究しておられ, 本小論の作成にあたって, いくつかの貴重なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。  
 (補注2) この「山中」については不明。牛丸康夫著『日本正教史』, 日本ハリストス正教会教団, 昭和53年, 35頁にも, ただ「山中某」とのみ記載されている。

(2001(H.13).11.11.AKT.)